

- 1 派遣期日 令和5年11月17日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 川口総合文化センター・リリア
川口市立元郷南小学校
所在地 〒332-0015 川口市川口3丁目1番1号

[川口総合文化センター・リリア／川口市ホームページ \(https://www.city.kawaguchi.lg.jp\)](https://www.city.kawaguchi.lg.jp)

3 研修内容

（1）大会テーマ（大会要項より）

先行きが不確実で予測の困難な「VUCA」の時代。そんな時代の大海原を目前にして、「Art」による「learn(学び)」は、これからの時代を豊かに生きる力を育む教育として見直されつつある。

資質・能力の育成、創造力や造形的視点の獲得、生活や社会との関わりなど、新たな造形教育の在り方も模索されている。本大会を契機に、埼玉県は、未来を拓き、子どもたちの希望となるような造形教育の新天地「Artlearntis アートラーンティス」を求めて船出する。

（2）視察校における研究への取り組み

元郷南小学校では、委嘱研究「主体的に粘り強く取り組み、気持ちよく他者と協働できる児童の育成」における課題と、児童の実態をもとに協議を進め、以下の3つの手立てが主体的に自信をもって活動する児童を育成する上で特に重要であると考え、研究を進めている。

- ①児童がイメージをもてるような導入の工夫
- ②思いを豊かに表現する活動の工夫
- ③豊かな思想を働かせて、自他と交流する工夫

以上のような手立てをもち、授業を行った結果、①においては、導入に対話を仕組んだことで児童のわくわく感が高まり、その後の展開への流れがスムーズになった。②においては、表現することを恐れず、一人一人が自信をもって自分の思いを表現することができるようになった。③においては、友達と自然な形で交流できるような工夫をしたことで、自然と対話が生まれ、自分の考えだけでなく、友達の捉え方も参考にしながら活動することができた。というような成果を得ることができた。

導入の時間を長くもったことで、試行錯誤の時間が削られてしまったり、終末の振り返りの時間を十分にもつことができなかつたりと課題も残った。今後は時間配分や内容を修正した上でこのような授業を積み重ねていき、研究主題にもある「自信をもって活動する児童の育成」に繋げていく。

(3) 視察校における授業の実際

① 第1学年 題材名「じぶんだけの わくわくボックス」

材料から自由に発想して活動に取り組むことが苦手な児童がいるという実態を踏まえて題材の目標を設定していた。発想を膨らませるための手立てとして、箱の中には自分の宝物を入れるということを伝えた。そのための飾り付けを考えることで、児童のイメージがより広がっているようであった。

② 第2学年 題材名「すけるん たんじょう」

「表したいことを自分で見つけて表す」という目的を意識して活動に取り組むことができるよう、材料との出会いの時間を大切にしていた。また、豊富な色のセロファンを用意することで、様々な色の組み合わせを試すことができていた。

クリアファイルの弾力性を、「折る」「丸める」「ひねる」「立てる」の動きから手や体全体で味わうことで、児童一人一人が作品作りにとらわれず、活動自体を存分に楽しんでいる様子が見られた。

③ 第3学年 題材名「にじんで広がる色の世界」

作品を作る際、様々な方法を試したり、途中で作り替えたりすることがあまりないという児童の実態を踏まえ、座席の工夫をしていた。活動しながら友達の様子を自然に観察できる環境を作ることで、新たな考えに気が付いたり、自分の作ったもののよさを感じたりする様子が見られた。また、本時までにPDCAサイクルを活用し、水の量の調整の仕方を児童自ら何度も試す経験をしたことで、本時の授業でも失敗を恐れずにどんどん試しながら、より自分のイメージに合うものを作ることができていた。

④ 第4学年 題材名「コロコロガーラーレ」

「つないでいく」ことをイメージさせるために題材名を工夫したことで、つなぐことをイメージして長くつなげようという児童の意欲を高めていた。友達と楽しんだり、個人で黙々と活動したりと、児童の思うままに作品作りが行われていた。身長よりも高くつないでいる児童もあり、体全体で味わっている様子が見られた。

⑤ 第5学年 題材名「ようこそ あの日の気持ちへ」

目には見えない感情を形や色で表現する活動を通して、自分らしさや思いを表現する力を養うことにつなげていくことを目指して題材を設定していた。心に大きな変化が現れる時期であるからこそ、作品作りを通して言語化できない自分の気持ちに気付いたり、それを表現したりしながら自分自身と向き合う時間になっていると感じた。

⑥ 第6学年 題材名「12年後のわたし」

自分自身の分身を作ることを通して、友達同士で自分の将来の話や、憧れの人物について話をする中で具体的に想像を広げている様子が見られた。針金を思うように曲げられずに苦戦している児童もいたが、友達の様子がすぐ近くで見られるような座席の配置になっていたため、友達の作り方を参考に取り組む様子が見られた。高学年だと、気軽に話しかけることに戸惑う児童もいると考えられるため、お互いの様子を自然と見ることができる工夫は発達段階の面でも有効であると感じた。

4 感想

- 学校全体が一丸となって図画工作科の時間を楽しんで行っている印象を受けた。作品を作る中で、試行錯誤しながら何度も作り替える姿が見られ、日々の実践の積み重ねを感じることができた。
- 校内のあらゆる場所に児童の作品が展示してあり、自分の作品があることが一人一人の居場所づくりのきっかけにも繋がっていると感じた。
- 作品の展示の仕方が工夫されており、作品があることで学校全体の雰囲気も明るくなると感じた。今後、本校にも取り入れていきたい。
- 今回、このような機会を与えていただき、市教育研究会には心より感謝いたします。